

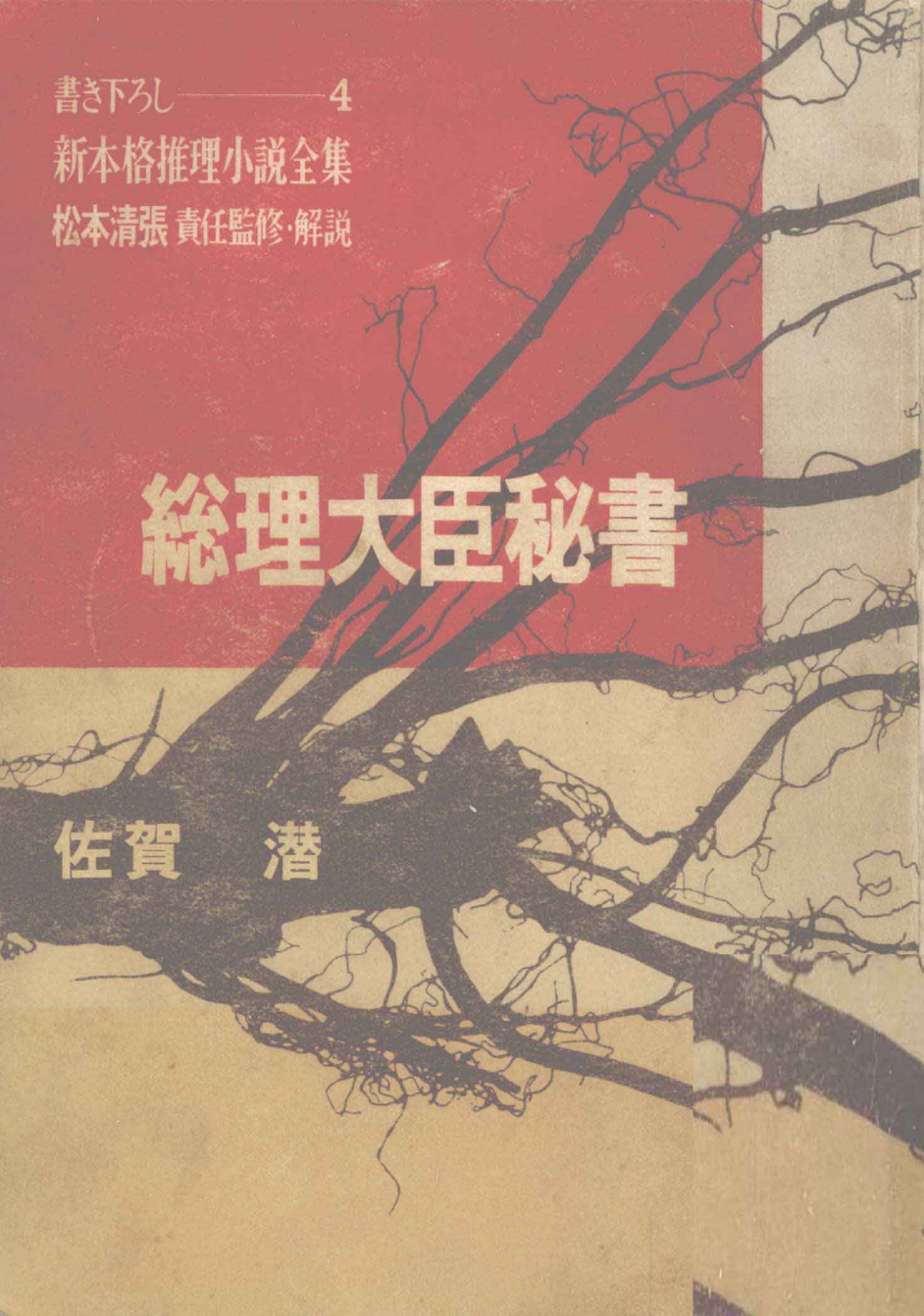
書き下ろし——4

新本格推理小説全集

松本清張 責任監修・解説

総理大臣秘書

佐賀 潜



総理大臣秘書



佐賀

潜



読売新聞社

書き下ろし・新本格推理小説全集 4

総理大臣秘書そうりだいじんひしよ

定価 三八〇円

昭和四十二年二月二十日 第一刷

著者 佐賀潜さ が かん

発行者 鈴木敏夫

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 株式会社堅省堂

発行所 読売新聞社

東京都中央区銀座西三の一

大阪市北区野崎町七七

北九州市小倉区中津口七三の二五

総理大臣秘書



佐賀

潜



読売新聞社

新本格推理小説に寄せて

松本清張

推理小説は昭和三十四、五年から爆発的な流行をみせた。これは、その少し前から海外の推理小説の翻訳ものが読者に迎えられていたことも下地になっていたのだが、それまでの普通の小説が、とかく、単調、難澁、平板に陥っていたことにもいくらか関係があるのであろう。読者は面白い小説に飢えていたともいえる。以前から推理小説の読者は知識人だったが、今度は同時に、新しく婦人層をも加えた。

その期の推理小説を考えると、傾向的には社会派、風俗派に分けられ、社会派を細分すれば、組織を主体とした、たとえば政、財界の内幕的なものや、汚職事件などがとりあげられ、また個人生活と組織とのつながりも題材となった。これは、文壇で組織と人間とが論じられたところに大体一致する。

風俗派のそれは当然に市井の暗黒面や恋愛、愛欲の姿が材料になった。アメリカのハードボイルドを下敷にしたものは街の暗黒面を描くのに役立ったし、男女の愛を描写するに

も推理小説的手法が在来の平板な小説より新鮮味を与えた。

こうしてみると、推理小説はあらゆる小説の題材分野を吸収していったことになる。その分野によって個別化していたそれまでの普通の小説題材を推理小説は綜合^{そうごう}結果したともいえる。それから、その描写にしても、何となくはじまって何となく終るといような普通の小説と違って、とにかく設計された構成が存在していた。普通の小説だと、書きながら途中でいくらかでも構想が変えられるが、推理小説ではそうはゆかない。伏線を縦横に引き、その伏線を最後に全部生かして一つの焦点に方向集中しなければならないからである。推理小説の読者は、伏線を絶えず気にしているのだ。

ジャーナリズムは読者の傾向に常に敏感である。当時の推理小説ブームの半分はジャーナリズムがつくったようなものである。雑誌「寶石」を編集していた江戸川乱歩が普通の小説作家に推理小説を依頼して回ったことなどもあって、途中からこの分野に参加する作家、新人群の出現など、推理小説は満開のお花畑の観を呈した。文壇小説さえ推理小説的手法を用いるのが流行した。

しかし、正直に言って、この時期に推理小説はその本来のあるべき性格を失いつつあった。その理由の一つは題材主義に倚^よりかかりすぎたためであり、一つはジャーナリズムが多作品を要求したため不適格な作品が推理小説の名において横行したことであり、もう一

つは、その結果、推理作家自体の衰弱を来したことである。これは反省すべきことであった。推理小説本来の興味は、アラン・ポウのジュバンもの以来、「謎」が伝統であった。

「知恵の闘い」(木々高太郎説)なのである。その意味では佳作がそうむやみと出るはずはなく、昭和三十四、五年から数年までのブームは空洞だったともいえる。あれは当時のジャーナリズムが半分ふくらました幻のブームで、現在の状態が普通である。いまさらジャーナリズムが「ブームの衰退」を云うのはおかしい。

今や推理小説は本来の性格にかえらなければならない。社会派、風俗派はその得た場所に独立すべきである。本格は本格に還れ、である。

しかし、ここまでできた推理小説の形式・内容が、戦前のそれにもどるべくもない。社会派・風俗派の通過は、ある意味において推理小説の視野をひろげ、対象を掘り下げ、程度を高めたことである。技術も前進させたと思っている。現時点で本格ものに還るといふことは、以上の基礎に立ったものであり、それからの新しい発展である。その意味で、わたしはさきに「ネオ・本格」という言葉を口走ったけれど、このシリーズでは「新本格推理小説」となっている。

およそ文学上の一つの発展には、作家によるグループ的な活動が必要である。それには有能な作家の参加が不可欠なことはいうまでもない。

幸いに読売新聞社がこの趣旨に副って新企画を打出した。いくら文学運動だといっても与えられる場がなければ手も足も出ない。わたしたちは欣然きんぜんとしてこの企画に参加することになった。執筆陣はこの書き下ろしに異常な情熱を燃やしている。推理小説本来の姿は、雑誌に輪切りにして発表される連載ものではなく、書き下ろしの封切版にある。本格ものはそうでなければならぬ。読者は、雑誌の上では一字もお目にかからなかった書き下ろし小説を、心ゆくまで愉しまれるに違いない。

わたしは、執筆者諸氏より年齢的にいささか先輩である故に、監修という役目をつとめることになった。その選択はわたしの責任による。顔ぶれにおいて、間違いない作家ばかりである。しかし、もちろん、ほかにすぐれた作家もあることだし、もし、第二の企画があればひ次の陣列に加ってもらうことにする。

各作家の傾向についての解説は各巻でわたしが担当するが、なにしろ、封切版だからわたしもゲラ刷をよむのがたのしみである。ただ、監修の責任上、各作品については前もって大体の構想について作家から聞いて意見も出している。ゲラを読んでも不審な点はダメを出して、読者への責を果すつもりである。

目次

新本格推理小説によせて 松本清張

第一章 総理大臣秘書の死……………11

第二章 事故死発表と疑問……………52

第三章 黒い外套と預金通帳……………92

第四章 殺人容疑者の顔……………128

第五章	詐欺恐喝事件内偵……………	167
第六章	政治資金十二億円……………	207
第七章	特捜部の捜査発動……………	243
第八章	舞台裏の犠牲者達……………	277
解説	松本清張……………	317

装丁 重原保男

總理大臣秘書

第一章 総理大臣秘書の死

1

暁暗の中を、強い風が吹いている。

電線が、悲鳴に似た呻き^{うめ}をあげ、固く凍った洗濯^{せんたく}干物が、はげしく揺れうごき、高い鉄塔にのせられた水道タンクが、風にあおられ、今にも崩れ落ちそうだ。

ここは、東京の西の端れ、世田谷区池尻町の公団住宅――。

三十二棟^{むね}の、薄茶色の鉄筋建が、倉庫のように、ぎっしりとならび、どの窓も暗く閉ざされている。一棟は、二階建八戸となっていて、各戸の壁面に、BH××号と大きく書かれた標識が出ているが、すべての棟は同色同型で、味もそっけない町を形成している。

シートをかぶせた乗用車が、何台も路上駐車しており、ところどころに、枯れた櫟^{けやき}の大木が、闇^{やみ}空^{ぞら}に枝をふるわせ、凍てついた露地にならべてあるポリバケツが、幾つものころげ走っている。

櫛の太木の前に、BH三号室があった。

高木東吾と墨で書いた横書きの表札が、出ている。四年間、総理大臣をつづけ、前年の秋、胃癌を病み、憲民党総裁の座を、工藤陸郎にゆずった本多正人の秘書の住居である。

二階六畳の間で、妻則子は、夢うつつの中で、風音を聞いていた。

則子は、夫の高木東吾と共に、谷川岳の夏山をのぼっている夢をみていた。沢を歩き、尾根の根雪を見上げているとき、風が出てきた。「この風は、暴風の前ぶれだよ」といって、高木が眉をかめた。

登山帽をまぶかにかぶった夫の眼を見つめた。突然魔風のように襲ってくる谷川岳の風の怖ろしさを、則子は知っていた。が、恐怖の感情は、湧いてこない。ただ、高木と二人だけにいる——という満足感を味わった。

高木が則子の手を取った。二人は、山小屋に避難した。則子は、高木の胸に顔を埋め、樹木をさわがせて鳴り渡る風音を聞いていた。

その時、ならんで寝ている一人娘の秋子が、熱にうなされ、呻き声をあげた。則子は、夢からさめ、枕元のスタンドの灯をつけ、あたりを見まわした。

壁の前に、タンスが二棹置いてある。その脇に、秋子の勉強机と椅子。桑の木で出来た三面鏡。洋服ダンス。

「夫の夢をみていたんだわ」

則子は、ひとりごとをいいながら、秋子のそばへにじり寄ると、額に手をあてがった。夫に似た面長の顔は、やや赤味を帯び、眠っている。宵のうち、三十八度あった熱は、依然として下らず、たなごころに沁みこむ体温は熱かった。則子は、枕元に用意してある洗面器の水で、濡れタオルをつくり、秋子の額にのせた。

則子は、外の風音に耳を傾けながら、隣室の襖に視線をそそいだ。二人が寝ている六畳間の隣りが、襖越しに四畳半になっていて、夫の寢室になっている。

夫の高木東吾は、前日の午前十一時頃、家を出たまま、まだ、帰宅しない。則子は、ふと、へもかしいたら、お帰りになってるかもしれない』と思った。

夫は、「今夜も、おそくなるだろう」と、いい置いて出ていった。則子は、夫の後ろ姿を見送りながら、いやな予感を抱いた。その予感は、本多正人が、内閣を投げ出した時につながっている。

「これでほんとだよ。長いあいだ、君にも苦勞をかけたが、これからは、自分の生活を取戻そうと思うんだ。後始末がすんだら、大蔵省へ戻ってもいいし、適当な会社へ入ってもいい。ともかく、秘書という仕事から、間もなく解放されると思うと、肩の荷をおろしたような気持ちになるよ」

と、高木が則子に語ったことがある。

が、年末が近づくと、高木は、連日、朝から夜中までとびまわり、人間が変わったように、表情が険しくなってきた。殊に、年が明けて、松が取れる頃になると、顔色が暗くなり、ふだん仲のいい妻に対してさえ、顔をそむけ、口をきかなくなってきた。

則子は、夫の苦悩が、なんのためであるか、はっきり判らなかつたが、総理大臣秘書としての、仕事にかかわりあいがあることだけは、見当がついていた。

「ね、おっしゃって。あなた、ご自分の心の中だけで、くよくよなさらず、わたしに打明けて……。なにを、悩んでらっしゃるの」

則子は、思い余つてたずねた。一カ月ほど、前のことである。

「なあに、すぐ片づくさ。心配要らんよ」

高木は、則子から視線を外らせて答えた。その横顔に、冷たいかげりが滲^{にじ}んでいた。太い眉と、二重^{ふたごもだ}瞼の大きな眼と、中高の鼻が、高木の美男振りの象徴だが、眼は落ちくぼみ、鼻梁^{びりょう}はとがりをみせ、皮膚の色は張りを失い、淀^{よど}んでいた。

高木は、本多首相の秘書になってから四年になるが、秘書としての仕事の外形を妻に語ることはあつても、むずかしい仕事の内容については、語つたことがない。

総理と一緒に行動したその日の足跡を、「朝、私邸に出かけ、十時半にお伴して国会へゆき、昼は、首相官邸で、〇〇大使と会食。午後は、国会の予算委員会出席。夕方から、ホテル〇〇〇で、経団連の首脳部と会い、夜八時から、赤坂の料亭で、光正会幹部と懇談会」というような、話しかけをするが、なんのために、誰^{だれ}と会つた——とか、誰々となんの話をした——というようなことは、話したことはなかつた。

が、則子は、夫の言葉の端から、仕事の重さと暗さ——を感じ取っていた。総選挙や、総裁公選